

技術と社会部門 2011 年度部門一般表彰

優秀講演論文表彰受賞者挨拶

部門優秀講演論文表彰を頂いて

吉田敬介(九州大学)

優秀講演論文表彰を頂き、本当は喜ばなければならないのですが、部門長経験者が部門の発展を考え、部門の活動を積極的にPRしたいとの意味で講演しただけで、特に講演論文の内容である「新☆エネルギーコンテスト」の発案者であり創始者は、玉川大学の久保英敏先生であり、私ごときがもらってよいのか（もちろん久保先生も受賞者の一人ではありますが）との思いがあります。また、第3回新☆エネルギーコンテストの企画を支えてくださったのは、九州地区の古くからの先輩後輩、特に熱工学所属部門の先生方やこの企画に賛同頂いた企業の方々でした。ここに改めて御礼を申し上げます。

新☆エネルギーコンテストは玉川大学でスタートし（2008年度、2009年土）、九州大学、岩手大学とつづき、今年度は日本大学工学部（福島県郡山市）に移り、その教育的効果により2013年も日本大学（同前）で開催されることが決まっています。この文を読まれた方は、ぜひエントリーを計画してください。

さて、「技術と社会部門は『弱小部門』」と私がこの部門で活動を始めてからずっと言い続けて参りましたが、それは当部門がまさに「大学会」である日本機械学会が抱える問題の一部を解決できる小回りの利く部門ではなかろうか、という意味が込められています。すなわち、学術団体の役割として、それが扱う学問分野を市民に（理解させるではなく）理解してもらうことが重要になっています。学術団体に所属する人々は、うっかりすれば自分のその専門分野に対する造詣の深さを自覚できず、「自分たちがわかっているのだから、他人もわかるだろう」と思いがちです。すなわち、一般市民が理解できないことを理解できないことがあります。「弱小部門」の役割は正に一般市民と「大学会」の翻訳者であるべきと考えます。当部門登録者が主に活動している「機械遺産」「技術者倫理」「（一般市民対象を含む）工学教育・技術教育」「産学連携活動」…、そして私が今、九州大学の移転に伴い活動している町づくり財団（(財)九州大学学術研究都市推進機構）における活動などは、一般市民が技術や科学の理解、あえて誤解を恐れずに言えば、宗教に対する畏敬の念や僧侶や神父など宗教祭事に取り組む者への尊敬と同様に、科学技術者への理解を深めることだと信じています。

ところで、講演論文の題材となった第3回新☆エネルギーコンテストは、工学部が移転完了した九州大学新キャンパス（伊都（いと）キャンパス）で行いましたが、敷地内に大きな高低差を有することから、伊都キャンパスで取り得る位置エネルギーを利

用して何か機械を発案してもらうことをテーマにしました。講演論文にも書いたようにユニークかつ実現可能性の高いアイデアが多く出されましたが、その中で、一人だけユニークな方法による位置エネルギー利用法を考案した学生がいました。それは、スロープのある道路上に小さな切れ込みを入れたホースを何箇所も設置し、そこを通過する自転車が制限速度を超えてスロープを下っていくと水が飛び出して運転者にかかり、不快なので運転者は減速する」という、自転車の速度超過の警報装置でした。アイデアだけで実物は作られていないため、「ものになった」かどうかは不明ですが、当日の審査員のほとんどすべては（私を含め）エネルギーの有効利用に繋がる研究をしてきた者であり、「位置エネルギーにより温度上昇がナンボ…?」「変換効率はナンボ…?」という発想は浮かぶものの、このようなアイデアはまったく想像できませんでした。

確か学習雑誌の編集長時代の能見正比古氏だったと思いますが、「化学の試験で『石炭からアルコールを作る方法』を問う問題で、多くの学生は習ったことを必死に答案に書き込んだが、一人だけ化学の試験の解答としては不適切かも知れないが、確実な方法を書き込んだ。それは『石炭を売ってそのお金でアルコールを買う』だった」という笑い（笑えない？）話を聞いたことがあります。そう言えば、NHKのアナログハイビジョン（MUSE）方式やNTTのISDNサービスなど、社会の役に立つと思いつながら優秀な日本の技術者が作った立派な技術が、その後出てきた廉価な高速デジタル技術に押されてなくなってしまいました。デジタル技術の進歩スピードが想像を絶する速さといえればそれまでですが、苦勞して開発にあたった技術者はどんな気持ちだったのでしょうか。しかし、もしかしたら社会はまさに「石炭を売ってアルコールを買ったほうが得」と思っていたのではないのでしょうか。もちろん、「だから技術者は…」などと言っている訳では全くなく、ものづくりに「純技術的」な考えは成り立たない、良い技術も悪い技術もない、すべては社会や社会の価値観がその技術や技術で作られた「もの」の受容度を決めてしまう、ということをお我々技術者は認識していなければならない、いえ、認識しておいた方が得ということですね。同じ技術が、同じものが、時と場所によって違う価値判断になる、すなわち技術者が目の目を見ることもあれば見ないこともある。したがって、ものづくりに携わる技術者は、常に社会への関心を持ち続ける能力を持つことが必要だと思います。市民への技術啓発活動だけでなく、技術者へのこのような能力の涵養を手助けすることも本会、特に当部門の役割であると考えます。

どうやら、部門長の挨拶のようになってしまいました。が、当部門が本会の社会的役割の一翼を担わねばならないとの新たな思いをここに表わせて頂きました。今後とも問う部門の発展を祈念し、優秀講演論文表彰を頂いたお礼のご挨拶と致します。

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.28

(C)著作権:2013 社団法人 日本機械学会 技術と社会部門